討論 2

林 良嗣 名古屋大学大学院環境学研究科教授 × **武村正義** 元八日市市長、元衆議院議員

ファシリテーター：野本慎一／土井 勉

野本●それでは、林良嗣先生、武村正義先生を中心にお話をお聞かせ願うことにします。

先ほどのご講演を拝聴いたしまして、これほど両先生のご意見が一致するとは思ってもみませんでした。林先生も武村先生もドイツにお住まいになったご経験があり、それにもとづいて、日本のこれからのあるべき姿をお話しいただいたかと思います。

スマート・シュリンク構想は財産権をどう考える

野本●そのなかで林先生は、これから人口減少社会が進む日本のとるべき道のひとつとして都市におけるスマート・シュリンクという考え方を提案されました。私は、これを遂行するうえで考えなければならない課題のひとつに財産権の問題があるように思いました。

都市計画を進めるうえで、国民がそれに従うかどうか、絵に描いた餅で終わらせないためにどうするかなどの課題についてお話を進めていただければと思います。

林●財産権というのは、財産に価値があってはじめて意味があるものですね。しかし、武村先生も私も異口同音に話したことですが、どんどん劣化する都市に財産は残るでしょうか。司馬遼太郎先生もそのように指摘されたことにほんとうに驚きました。そういう意味では、財産権で財産を守るというのは幻想ではないか。それよりも、財産をどのように築くか、復活させるかを考えるべきではないでしょうか。一人ひとりが個別の行動をとると、トータルとしての財産価値を落とすということを身にしみてわかるべきだと思います。

私は、最近の住宅は31年の寿命と申しました。一所懸命働いてお父さんが建てた家も、31年で無に帰すのです。不謹慎に聞こえるといけませんが、都市のなかのそれぞれの箇所が31年に1回、津波に遭っているのと同じです。都市全体がまとめて同時に津波に遭っているのではないのですが、建て替えるたびに周囲の人を津波に巻き込んでいる、そういうイメージがあります。

ですから、やるべきことは、価値が生まれるようにお金が回るしくみをつくることです。投資にはリターンがないといけないのですが、無計画に投資してもらうと、リターンどころか、ほかの人の財産の価値までもなくすのです。

その意味で、私は自動車税のグリーン化の話をしました。自動車税のグリーン化というのは、昔はエンジンのサイズが大きいほうが税金も高かったのですが、いまの税は同じサイズのエンジンでも排出ガスの少ないほうが安くなっていて、結果として世のなか全体が得するしかけです。同じように、地主とその土地に移入してくる人の両方に恩恵があるようにすれば、財産権を主張して抵抗するということがずいぶんと減るのではないかと思います。

100年後の日本を構想する条件と国民性

土井●私は武村先生にもう少し話を発展させてうかがいたいことがあります。というのは、お話の最後に、これから100年かけて日本をつくり替えればよいとおっしゃいましたが、社会にしろ、暮らしにしろ、なにかを変えなければならないと多くの人が思っている。善し悪しは別にして、民主党政権が選ばれたこともそのひとつだと思います。なにか変えないといけないという思いが、投票行動につながったのでしょう。

同時に理想を語ることも大事ですね。ドイツが美しいのは、ドイツの人たちが「美しいまちをつくろう」と向かった結果でしょう。では、私たちはどういうまちを100年後にめざすのか。それを共通の言語にすることが大事ではないか。こういう問題について、もう少しお話しいただけますか。

武村●私の感想ですが、日本人というのは物事が変わることや、動くことにきわめて素直であり、おおらかで、あまり抵抗しない民族です。表現を変えれば、新しいことや、他人に強い関心を抱くことです。結果として、古いものを守るとか残すことにあまり気持ちが向かないし、執着もしない。だから、壊すことにも躊躇しないのです。日本民族は変化を尊ぶ民族ではないかと思います。

このあいだも台風に見舞われましたが、春夏秋冬たえず四季が変化する日本において、われわれは状況に自分を合わせて生きることに長けている。昨日まで鬼畜米英と言っていたのに、戦争で負けた日から子どもたちもニコニコしてチューイングガムをもらいに進駐軍に近寄る。親も英語の勉強をはじめる。このような日本人の新しいものに対する大胆さ、率直さ、鮮やかな転換というのは、どこからきているのでしょうか。

振り返ってみると、江戸時代の日本は美しかったのではないですか。都市計画の専門家などいなくても、城下町にしろ、

門前町にしろ、農村部の小さな田舎でも、一つの風景があったように思います。安寧を感じさせるまとまりというものがあったのではないですか。

われわれの先祖はそういうものをもっていました。明治以降に近代化したわれわれ日本人は、そういうものをなんで簡単に忘れてしまったのだろうか、そういうことを自問自答してしまいます。

土井先生の質問に答えていませんかね。（笑）

社会的な装置が疲労骨折をはじめた日本

林●私もそのことをすごく感じます。ほかの国に住まれたことのある方もそうお感じだと思いますが、アメリカのように歴史もあまりないし、無節操なのではないかと思われているような国でも、住宅の耐用年数は44年です。日本よりも5割ちかく長いわけです。日本人はそういうところをずいぶん勘違いしている。戦後の日本人は、過去10年のことしか記憶にとどめていないような気がします。それではあまりにもったいない。

▶東日本大震災で被害を受けた家々。これからどのようなまちづくりを進めるかが課題だ

先ほど申しあげたように、じわっと、しかも大きく変化していくわけで、大きな変化にどのように対応すべきかをもっと考えるべきです。もう少し自分で考えて対応しないと危ないのではないかと思います。

武村先生は、日本は変わり身が早いということをおっしゃったのだと思いますが、将来がどうなるかをよく考えたうえでの変わり身ならばよいのです。サッと変わるというのはよい面もありますが、こと環境と土地利用に関しては、将来のことをよほどよくイメージしたうえで変わることが必要です。

今回、大震災というものすごいショックを受けたわけです。いまの日本は、いたるところが津波以外の力で被害を受ける可能性がありますし、ソーシャルなしかけが疲労を起こして被害を起こすということもあります。そのあたりの対策を本気で考え直す必要があると、私は思っています。

伝統的価値観や美意識の混乱が新たな混乱を生む

土井●ヨーロッパの石造りの町並みを残すには、強い意志が必要ですね。経済的な力も必要だと思います。いっぽうで、私たち日本人は恒久的なものをハードとして残すというよりも、伊勢神宮の遷宮のように20年たったらつくり替えることを考える。そのつくり替えるソフトを含めての全体像を継承しようという気持ちのほうが強いのかなと思ったりしました。

町並みにしても、たとえば江戸のまちは火事がたいへん多かった。したがって、すぐにつくり替える力を養うとか、家財道具を少なくする、まちを清潔にしておく、そういう文化を育むことで、たくさんの人が集まって住む作法を大事にしてきた。私たちがヨーロッパのまちを知ることで、日本のそういう価値観や美意識がなんだか混乱してきた。ヨーロッパなどの知恵や精神に学ぶとともに、伝統的な日本の町並みや社会についての考え方を加えて、新たなモデルをつくることは、震災後のいまはとくに望まれているのではないでしょうか。

その一つの方向が、林先生が提案されているスマート・シュリンクの考え方であったり、街区ごとにまちを考える手法だったりすると思うのです。ハードとともにソフトのあり方について考えることで、前半でお話しいただいた安寧のまちをつくる考え方とうまく重なればと期待しています。

野本●震災の復興などのさいは、従来の公平性を保つシステムが逆にネックになることもあると思います。都市計画を遂行するとはそういう一面も必要だと思うのです。

諸外国にくらべていまの日本でいちばん平等なのは、国民皆保険制度に守られている医療だと思います。今回の復興では、義援金の配分にしても、仮設住宅の建設や入居にしても、すべて平等でないといけないという前提に立つと、対応のスピードが遅くなってしまう。都市の再開発にしても、林先生のスマート・シュリンク・シティにもっていこうとすると、かなり強力な権力というかリーダーシップが必要になってくる。その公平性を追求した場合に、われわれ住民はどのように割り切ればよいものでしょうか。

社会をシミュレーションできる政治家とリンクできる研究が必要だろう

林●いまの日本は社会主義国でも全体主義の国でもありませんが、侍の時代あるいはその前の時代から戦前までのまちになぜ統一感があったかというと、やはり強大な権力があって御上の意向でまちがつくられてきたからだと思います。では、今様の統一性をどのように実現するかです。コンパクト・シティだけを唱えてもだめだというのと同じように、スマート・シュリンクを唱えるだけでもだめです。それをどうやって実

現するかということが重要なのですが、やはり制度設計だと思うのです。こうしたらみんなが豊かになる、得をする――金銭的に得するという意味でなくて、価値が生まれるという意味ですが、そういう制度設計をみんなで相談していくことだと思います。

たとえば、武村先生のおっしゃった自然に帰るといいますか、自然の懐に抱かれながらもう一回生きられるかということを思うのですが、都市のまん中に住んでいる人がいったいだれから恩恵を受けているのかをよく理解しないといけない。最近は森林税がでてきたし、水源税は昔からあります。しかし、そういう縦割りではなくて、自然のトータルな価値をどのように受けているのかを含めて考えて、たとえば税金のようなものを入れる。あるいはスマート・シュリンクをすることによって、私がたとえば自己中心的で、郊外の安くて自分としては環境がよい場所だから住んでいるのだけれども、「そこを動いてくれませんか」と言われたときに、やはり少し優遇されることがないと動けない。

▶町並みにまとまりが感じられるフランクフルトを上空からのぞむ

あるいは、家が100軒あるところに防波堤をつくったとします。田老地区の防波堤についてきょうご紹介がありましたが、防波堤には1kmあたり1,000億円かかっている。そういうところに住むということに、社会は高いコストをかけているのです。漁師の方はそこに住まないといけないわけですが、そういう特殊な場合は別です。そうではない場合に動いてもよいと本人も思い、そうすることが社会のためにもなってトータルのコストが下がる。これを考えるのは私たち学者の仕事ですが、そういう意味での学者の能力があまりにも低いのです。縦割りの深堀りでノーベル賞をとる、それも重要なのですが、今回の大震災のような自然の力をきちっと受け止めることをしようと思ったら、ノーベル賞が1,000個あってもできないわけです。縦割りではなく、横の発想も必要です。ですから、トータルなシミュレーションを提示していく政治家、それから政治家とリンクがとれるような研究が必要です。できないことはない。私も細々とやっていますが、一つひとつ解き明かしていけばきっとできると思っています。

自動車税のグリーン化にはたくさんの反対がありました。しかし、情報を提示して1年待って導入したら間違いなく空気がクリーンになりました。自動車会社も懸命に環境負荷の少ない、よいエンジンの車をつくろうという競争が起こりました。国はそれに対しての直接の補助金は自動車会社に一銭もだしていませんが、大競争になりました。消費者が動くのが恐いからです。消費者もマーケットが動けばそちらを追いかけます。偶然かもしれないですがメカナイズするしかけができたわけです。しかも、みんなが得している、だれも損していないはずです。そういうことを土地利用に関して合意していくためには、科学的な情報をきちんとだすことが必要です。市民感覚とあまり段差のないレベルで、わかりやすく見せる、そういう能力が研究者にも必要だと思います。

まちづくりに個性を競いあうのが地方自治

武村●平等化は画一化にもつながりますから、義援金の配分にしても末端の自治体になればなるほど公平に、平等にという意識が強くなってなかなか進まない。事務官は漏れがないか、デコボコがあったら後で叱られるからと、その処理にすごく時間がかかってしまったりする。悪いサンプルです。

まちづくりや地方自治にしても本来、公平・平等ではだめです。個性的でないといけない。個性を競いあうのが地方自治です。地方のことを東京はどうこういわないで、地方に任せるのです。地方の住民が自らの責任でまちづくりをしてくださいというのが自治です。あまりキョロキョロしてはいけない世界が地方自治であり、まちづくりの世界だと思いますね。

私が滋賀県政を預かっているときも、私がなにかというと県の部長や課長は、「農林省がこういっています」、「いや建設省が怒ります」、「厚生省はこうです」と、すぐに東京の役所の話をする。私は、「鈴鹿の山の向こうの話をするな」と怒ったことがあります。（笑）「滋賀県は滋賀県民の足下を見て滋賀県の自治を発想せい」と言ったこともあります。日本の地方自治の世界には、中央に振り回される体質がたいへん色濃く残っていて、それがまちづくりを画一化させたり単調化させたりする背景でもあると思います。

野本●武村先生は「時事放談――ワイドショー政治を叱る」というテレビ番組によく出演され、そのなかでも「現在の政治はポピュリズムに走っている」とご指摘されていたように思います。そういう政治では新しい制度設計をつくるのはなかなか難しいかもしれませんね。

武村●ここで民主党の悪口を言うつもりはないのですが、少し脱線します。（笑）民主党の諸君にはいろいろ批判点があ

※写真はすべて林良嗣先生提供

るのですが、一つはきわめて中央集権的なこと。子ども手当にしても、あんなものは地方自治体が主役の世界です。そういう最末端の話を画一的に中央でポーンと決めて、毎月一人26,000円として例外を認めない。きわめて画一的というか中央集権的です。民主党政権には、地方主権や地方分権があまり感じられません。答えになりませんが、これは一つの問題ですね。

土地の記憶を蘇らせる地域の知恵に期待

林●私は先ほど街区単位でやりましょうという話をしましたが、あれは審査をすればよいと思っているのです。市町村ごとに審査する。私はパリとかドイツとの比較を見せましたが、それと同じようにつくればよいということではありません。独特の土地の記憶が表出しているかどうかも、ひじょうに重要な審査の項目にする。最後にはそれがないとだめです。これが重要です。

そして、それぞれの土地の記憶をどのように蘇らせるか、自治体ごと、地域ごとの知恵がでてくれば、なるほどとおもしろくなってきますね。武村先生がおっしゃったように、これが画一的だとこんなにつまらない国はなくなってしまう。あきあきして早死にするのではないかと思いますよね。（笑）やはり多様性があってこそすばらしくなる。それは生物だけでなく、人間とか言葉とか、そういうものでも同じように大事だと思います。

▶地域の多様性やそれぞれの土地の記憶をたいせつにしたまちづくりをめざしたい

社会の秩序と人間性が安寧の都市の源に

林●私も震災の調査に何回も行っていますが、道の駅に行ったら、外のテントでおばさんがりんごを売っていました。1,000円で何人分か買おうかと思って1,000円札をだすと20個ほども入っている。そのおばさんがもう一つの袋にもりんごを入れようとするので、「こちらのほうが傷んでいないからいいですよ」というのかと思ったら、「これはおまけだ」という。そういうものに触れて、地域にはそれぞれに違ったすばらしい人間性があって、これを失ってはいけないと思ったわけです。

全国総合開発計画で、毎回均衡ある発展といわれてきましたが、一回も成功していない。それは経済の均衡ある発展をいっているわけであって、お金のマスでもって均衡するだけでなく、それを最終的に人間の感じる価値とか、「安寧」という価値で測ったときに、多様で、うまくバランスする。そのような意識をもつことで、すばらしいこの国を持続させることができるのではないかと思っています。

武村●1950年に国土総合開発法ができました。これは国土の利用と開発、産業や工業の立地、そういうことの基本となる法律です。同じころ西ドイツでは、ドイツ語でBundes-Raumordnungsgesetzという法律が誕生しています。raumはスペースという意味で、Ordnungは秩序化。ですから、Bundes-Raumordnungsgesetzは国土秩序法、あるいは国土整序法とでも訳すべきでしょうか。日本はディベロップメントの開発法。ドイツはOrdnung、秩序の系列です。開発と秩序化の違いです。スペース全体を一つのまとまりとして捉えようという発想に、日本とはぜんぜん違うなということを当時も感じました。

土井●どうもありがとうございました。こういうことは世の常で、話が盛りあがってくると時間がきてしまいます。このセッションをまとめなさいという指示がきました。（笑）

お二人のお話のとおりで、とくに最後のご指摘が私たちのめざす安寧の都市の姿かなと思いました。全国一般で通用する標準的な設計よりも地域の多様性を大事にしましょう、自己責任の自己決定をしましょう、手づくりのまちが大事だよということですね。こういうことをこれからさらに議論し、これが安寧の都市だという姿をみなさまと一緒に考え、提示できればと思っています。

では、すばらしいお話をいただきましたお二人に、拍手をもって感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。（拍手）

第2回　安寧の都市ユニット　シンポジウム
2011年7月23日　京都大学百周年記念ホールにて